

# 東川小学校・地域交流センター

## 【キーワード】

〔施設種別〕  高齢者施設  障がい者施設  子ども施設  住宅 ( )  
〔運営主体〕  市区町村  法人  NPO  個人 [補助金]  内閣府  国土交通省  厚生労働省 ( )  
〔建物形式〕  1棟単体型  複数棟集合型  団地型 [建物状況]  新築  増築  改修  一部改修  既存  
〔対象者〕  高齢者  障がい者  子ども  ファミリー  多世代



写真1. 外観写真

東川小学校 2014 年が地域交流センターを併設する形で移転・新築された。教室を含む6学年分のワークスペースが東西に並んだオープンスクールで、片流れの屋根と北側の大開口が連続して並び、校舎北側に運動場が広がる。地域交流センターや隣接する特定地区公園（東川ゆめ公園）と連携し、自然豊かなこの地域ならではの教育を展開する。

## ■施設概要

所在地：北海道上川郡東川町北4号西8

施設種別：小学校

地域交流センター

交流プラザ

多目的ホール

食育研修室

学童保育（120名）

会議室

運営主体：東川町

設計：小篠孝雄＋北海道大学工学研究院小篠研究室

敷地面積：42,124.01㎡

建築面積：11,336.74㎡

延床面積：10,922.11㎡

構造：鉄筋コンクリート造、一部鉄骨鉄筋コンクリート造、鉄骨造、木造

運営開始：2014年10月1日

## ■運営概要

東川町は、近年町外からの移住者が増え、人口が増加している。その背景の1つとして、豊かな自然を生かした教育環境の整備にある。

併設された地域交流センターは、東川小学校が地域学習の拠点となるようにと、交流プラザ・多目的ホール・



写真2. 立地周辺 (google map より)

東川の中心部は、旭川市街地から東に約5km離れている。東川小学校は、田畑に囲まれた市街地の北東のはずれに位置し、さらに北には大雪山がそびえる。



写真3. 東川小学校正面玄関

児童玄関の前には彫刻家安田侃氏の作品が置かれる。左手に見える体育館の太陽光パネルで、小学校で使用する電力のほとんどをまかなうことができる。

## 参考文献

- 1) 東川町ホームページ 暮らしのガイド 学ぶ・楽しむ (<https://town.higashikawa.hokkaido.jp/living/learning/>) 参照 平成30年9月20日
- 2) 新建築 平成29年4月号 114頁～123頁 参照 平成30年9月19日
- 3) 東川町教育委員会ウェブサイト (<http://higashikawa-edu.jp/>) 参照 平成30年9月21日



写真4. 東西に抜ける270mの直線廊下

6学年のワークスペースが並び、廊下と学習スペースが家具で仕切られる。学年カラーを内装や家具に反映させることで、空間にメリハリが生まれる。

食育研修室・学童保育・会議室が計画された。多目的ホールは休み時間の児童の遊び場として、また小学校内の図書室は、放課後、学童の活動中でも自由に入出りできる仕組みになっており、機能連携がなされている。

東川ゆめ公園は、東川小学校の運動場の北側に球場やサッカーコート、芝生のエリアが連続して配置され、校舎南側正面にも畑や果樹園が整備された。それらと小学校とは境界を分けず、敷地が連続化された。また、周囲には広大な学校田や模範水田が広がり、小学校や地域の食育の一環として学社連携のプログラムに利用されている。

このように各機能を連携して運営するために、東川町は他の町内小学校、中学校などの教育機関と全町的支援組織として学社連携推進協議会を立ち上げた。そして行政組織の業務内容を縦割りから横割りに変更し、教育委員会の生涯学習推進課を整備することで、東川町が目指す教育連携の実現させた。

## ■ワークスペースの構成

東川小学校は、教室をオープンにし、学年のスペースを各教室前に大きく設けた。ワークスペースに壁はなく、家具配置によって掲示や個別活動などのスペースを分け

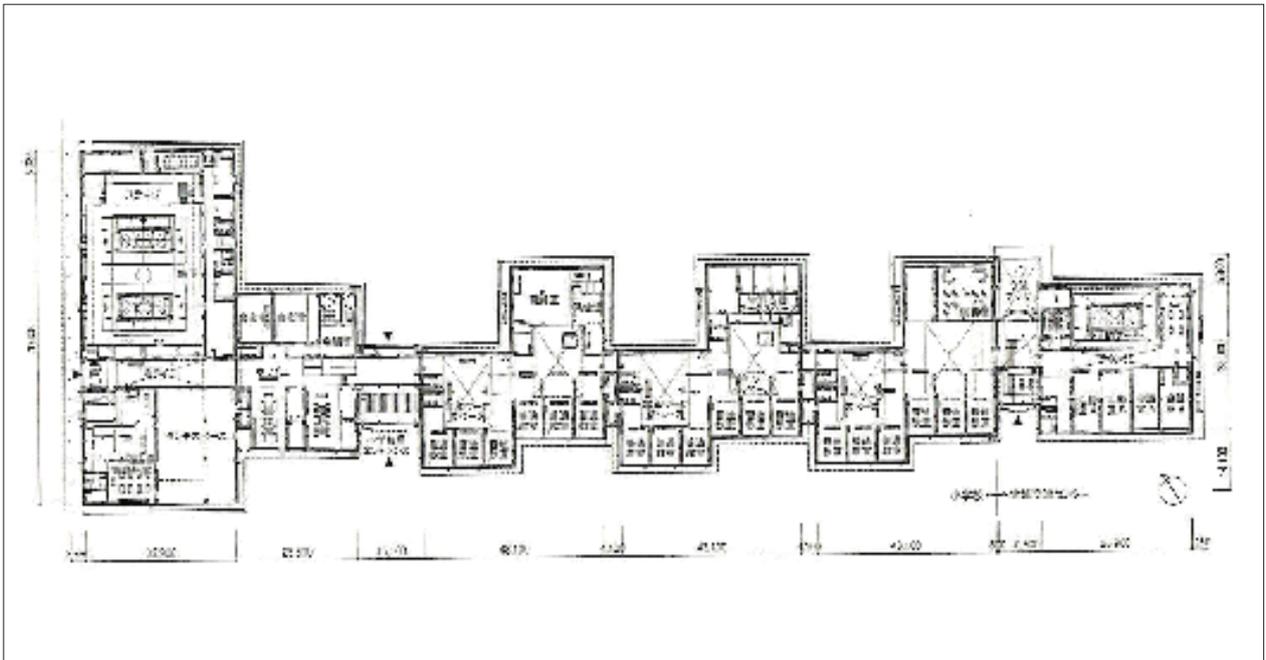


図1. 東側小学校・地域交流センター平面図（新建築2017年4月号より）

図の右側から地域交流センター、普通教室、玄関、特別教室、体育館やランチルームと並び、それらを直線廊下がつなぐ。北側に大きく開口が設けられているほか、ハイサイドライトからの光により昼間は電気をつけなくても明るい空間となる。一部を除き平屋であるが、西側に向かって緩やかな傾斜がかかるため、機能に合わせて3つのレベルに分かれる。

ている。これには先生の創意工夫が必要となるが、学年に応じた適切な空間づくりが可能となる。また、学年ワークスペースは、教室空間に向かって傾斜のかかった片流れ屋根が採用されているが、これにより北側にできた大開口からは、東川のシンボリック的存在である大雪連峰や田園風景が一望できる。

夏季は南北の開口を開けて自然換気を行う。また全館二重床になっており、冬季はヒートポンプにより建物全体を暖める。ワークスペースは、北側の大開口やハイサイドライトからの自然採光でも十分な明るさが確保でき、電力使用量を低減している。

## 東川の豊かさに触れながら育つ

東川町の人口増加は、他地域からの転入によるものが大きく、その中でも子育て世代が多い。その一方で、進学や就職を機に町外へ転出する若者も多いのが現状である。そこで町は、東川で育った子どもたちが将来町外へ出たときに、改めて東川の良さを実感し、再び東川に戻りたいと思うような教育環境を作ろうと試みた。

### ■風景を建物に取り入れる

ここ東川の代表的な原風景といえば、きっちりと分けられ整然と広がる水田と、北側に広がる大雪山である。設計者は、この美しい風景を子どもたちが日常に感じられるよう、校舎の北側に大開口を設けた。面する廊下やワークスペースには、景色を楽しめるようにベンチを置いた。中でも地域交流センターの交流プラザは大雪山への眺めが一番良いとされ、手前にある客席からの視線が北側に抜けるような構成で設計された。

### ■地域と暮らす

東川小学校では教室や体育館の床材として東川町産のシラカバやメジロカバを使い、子どもたちが座る椅子や家具も東川町産の木材で作られた。また校内のいたるところに木で作られた作品や、特別にデザインされた東川家具が置かれる。

東川小学校には、子どもたちが日常的に地元の木材や芸術文化に触れることで、地域への愛着を育み、豊かな人格を具えた人間へ成長してほしいという人々の願いが詰まっている。



写真5. 廊下からワークスペース全体をみる

奥に見える両端が教室、中央が多目的教室で、将来クラス数が増えた時は教室として使用できる。手前のホール空間は子どもが走り回るのに十分な広さだ。



写真6. 教室とホールの境目

学年によって家具や小物で空間を仕切り、ワークスペースをうまく使い分けている。休み時間には、子どもは好きに居場所を見つけて休み時間を過ごす。



図7. 交流プラザ

地域交流センターの一部で、コンサートや小学生の合唱で使用される。中央には、玄関前と同じく安田侃氏の作品が置かれる。



図8. ワークスペースの天井をみる

ワークスペースのハイサイドライトから光が差し込む。地域に生息する鳥をモチーフにしたモビールは、東川の作家の作品だ。空中を漂う様子から、風の流れを感じられる。



図9. 体育館

一般的な小学校の体育館よりも大きく作られており、一定のコートの高さを必要とする種目の体育大会で使うことができる。ハイサイドライトには電動式の暗幕が設置された。

## ◆ 学社連携の教育プログラム

東川町は、地域が子どもたちの教育に参画することで、学校と地域が一体となって子どもたちを育てる環境の整備に取り組んだ。地域住民、地域の企業や団体と子どもたちとの交流は、子どもたちにとってだけでなく地域にとっても重要な学習の場にもなり得る。新たな町の教育拠点に、東川での暮らしの豊かさを体感できる機能を配置した。

プログラムの1つに、稲作による食育活動がある。学校東側に配置された学校田、模範水田を「田んぼの学校」と名付け、学校がJA東川と地元の若手農家の有志と連携し、小学校の児童に水田体験や作業見学等の活動を提供する。地域の農業事業者や地域交流センターの職員が指導、サポートを行い、児童が田植え、草取り、稲刈りを体験する。2015年度の実績として、町内の学校給食の半年分を賄える量のお米を収穫することができ、給食費用の削減につながった。節約された費用は、財源確保として学社連携プログラムの運営費に回された。

体験農園では大豆も作っており、児童は収穫した大豆で味噌や豆腐作りを行う。これらの体験農園は、東川町学者連携推進協議会の体験農園専門部が管理を行い、このような活動を企画・実施する。

今後の構想として、東川ゆめ公園内の果樹園で収穫された果実を使って、地域交流センターの食育実習室で食材加工を行い、加工品を販売するプログラムを考えている。このような様々な

連携によって、地域の特色を生かした環境教育と食育プログラムが実現可能になっている。



図10. 体験水田

校舎の北側には、広大な学校田が広がる。大雪山からゆるやかな傾斜になっており、雪解け水がここ一体の用水路を流れる。左手には東川ゆめ公園が広がる。